

※国語教育専攻用注 一般前期試験（A日程・B日程）では、現代文（評論）の代わりに選択可能な、漢文の大問を出題します。

国

語

（教育学部 国語教育専攻 90分 200点）

注意事項

(1) 受験する学部（専攻）によって解答すべき問題を指定しているので注意すること。

受験する学部（専攻）	解答すべき問題	解答時間
教育学部 国語教育専攻	一 A・二 三・四、または二 B・三 三・四 ※二はA「漢文」かB「現代文」から一つ選びます (AとBの両方に解答してはいけません)	九〇分

(2) 解答をマークする問題では、マーク式解答用紙の解答欄にマークしなさい。例えば、10と表示のある問いで「③」と解答する場合、下の（例）のようにマークしなさい。

(3) 解答を記述する問題では、記述式解答用紙の解答欄に記述しなさい。例えば、記述式 2と表示のある問いでは 2の枠内に記述しなさい。字数に制限のある場合、句読点・カッコも一マスを使うこと。

解答番号	解	答	欄
1 0	①	②	③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

（例）

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

一 選択 A (漢文)

※一 A を選択する場合、二 B の解答欄(マーク式 1 ～ 9)には何も記入しないこと。

次の文章は『春秋左氏伝』の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合上、訓点や送りがなを省略した部分がある。

子皮^{し ひ}欲^ス使^{メント}尹何^{みん か}為^{ヲシテをさメ}邑^ヲ^a。子産^{し さん}曰^ク、「少^{わかシ}。未^ダ知^ラ可^ニ否^ヲ。」子皮^{し ひ}曰^ク、「愿^{まじめナリ}。吾^ス愛^ス之^ヲ。不^ル吾^ニ叛^カ也[。]使^{メバ}夫^{かれヲシテ}往^{キテ}而^ニ学^バ焉[。]夫亦^ニ愈^{いよいよ}知^{ラント}治^ヲ矣[。]」子産^{し さん}曰^ク、「不^{ナリ}可[。]人^{スルハ}之^ヲ愛^{スルハ}人^ヲ、求^{ムル}利^{センコトヲ}之^ヲ也[。]今^ニ吾^ゴ子^{しノ}愛^{スルハ}人^ヲ、則^チ以^{テス}政^ヲ。猶^ホ未^ダ能^ハ操^{ルコト}刀^{たうヲ}而^ニ使^{ムルガ}割^カ也[。]其^ノ傷^{ツクルコト}实^ニ多^{カラシ}。子^ニ之^ヲ愛^{スルハ}人^ヲ、傷^{ツクル}之^ヲ而^ニ已^{シテ}。其^レ誰^カ敢^{ヘテ}求^{メン}愛^ヲ於^ニ子^ニ。子^ハ於^ニ鄭^テ国^ニ、棟^{むなぎ}也[。]棟^ニ折^{ルレバ}榱^{たるき}崩^ル。僑^{けう}将^ニ压^{サレント}焉[。]敢^ニ不^レ尽^ス言^ヲ。子^ニ有^{ラバ}美^ニ錦^一、不^レ使^ス人^ヲ学^ス製^ヲ焉[。]大^ニ官^ハ大^ニ邑^ハ、身^ノ之^ヲ所^レ庇^{かばハルル}也[。]而^ニ使^{メントス}学^ブ者^{ヲシテ}製^タ焉[。]其^ノ為^ニ美^ニ錦^一、不^レ亦^{カラ}多^一乎[。]僑^{クモ}聞^ニ学^{ビテ}而^ニ

後^ニ 入^ルレ 政^ニ、未^ダ聞^ルレ 以^カレ 政^テ 学^ヲ 者^一 ヲ 也。若^シ 果^{タシテ} 行^{ハバ}レ 此^レ、必^ズ 有^{ラント}レ 所^{スル} 害^〇」

(注) 子皮——春秋時代の鄭国の大夫。 尹何——子皮の家臣。 子産——名は「僑^{けう}」。 製——裁断すること。

問1 二重傍線部 a、b の読み方を、送りがなを含めてひらがなで書きなさい。現代仮名遣いでよい。解答番号は、a は記述式 1、b は 2。

問2 波線部 p、q の本文中における意味・用法を、それぞれ漢字二字で答えなさい。解答番号は、p は記述式 3、q は 4。

問3 「A 敢不尽言」を全てひらがなで書き下しなさい。現代仮名遣いでよい。解答番号は、記述式 5。

問4 「B 不使人学製焉」は、「人をして製^たつことを学ばしめざらん」と書き下す。これに従って、次の白文に訓点を付けなさい。解答番号は、記述式 6。

不 使 人 学 製 焉

問5 「**C**行此」について、「此」の指す内容を明らかにしながら口語に訳しなさい。解答番号は、**記述式 7**。

問6 本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 8**。

- ① 子皮は、尹何のもつ独自の政治哲学が、現在の邑の混乱を収めるのに必要だと考えた。
- ② 子皮は、子産の厳しい批判をかわすために、誠実な若者を探し出し、あえて**拔擢**^{はってき}してみせようとした。
- ③ 子皮は、尹何が非常にまじめな性格で、子皮の意見に背くことがないという点を、高く評価していた。
- ④ 子産が、子皮の人材登用案に強く反対したのは、若い人材の登用自体が伝統的な儀礼に反するからである。
- ⑤ 子産は、政治に携わるには、まず邑を治めてみて、その失敗から政治のあり方を悟るのがよいと考えている。

一 選択 B (現代文)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

※ B を選択する場合、 A の解答欄 (記述式 1 ～ 8) には何も記入しないこと。

「ベルグソンの哲学的的方法論」のなかで(注)西田はベルクソンの「直観」の概念に触れ、それについて次のような説明を加えている。「物自身になって見るのである、即ち直観 Intuition である。従つて之を言い現わす符号などいうものはない、所謂言絶の境である」。あるいは「実在の真面目は ^a トウテイ外から之を窺うことはできぬ、唯之と成つて内より之を知ることができるのである(所謂水を飲んで冷暖を自知するのである)」とも述べている。

ここではベルクソンの「直観」を説明するために、「物自身になって見る」、あるいは「之と成つて内より之を知る」ということが言われているが、それは同時に「純粹経験」を説明したことばとしても受け取ることができる。たとえば『善の研究』の第二編「実在」第九章「精神」において西田は、精神と自然とを対置する二元論的な立場を批判して次のように述べている。「我々が物を知ることとは、自己が物と一致するというにすぎない。花を見た時は即ち自己が花となつて居るのである」(二二四―二二五)。

「純粹経験」というのは、自己と対象とが一体になった経験であり、それは——ちょうど冷暖については自らそれを確かめるほかはないのと同様に——自分自身で知るほかはない。つまり「内より之を知る」ほかはない。それは「言絶の境」であり、言葉で言い表すことはできないというのが西田の理解であつた。

西田が言うように、言葉は私たちの具体的な経験の一断面しか示すことができない、したがつてそれを全体として把握するためには「自得」するほかはない。物事には言葉では表現できないものがある、それについては自ら直接経験し確かめるほかはないというのは、もつともな主張であると言ふことができる。

しかし言葉が私たちのなかで果たしている役割については、もう少ししていねいに見ていく必要があるように思われる。

西田は「純粹経験」について、そして「直観」について、「言絶の境」であると言ふのであるが、そもそも私たちは言葉と経験をと厳密に区別することができるであらうか。別の言い方をすれば、言葉になる以前の経験、もしそれをたとえば「原経験」と言い表すすれば、この言葉がいつい関与しない「原経験」を実際にそれ自体として取り出すことができるであらうか。この点について考えてみなければならぬ。

たとえば庭に咲く黄色い花を目にしたとき、「黄色い」とか「花」、あるいは「咲く」といったことばがまったく関与しない純粋な経験の状態に立ち戻ることができるであろうか。実際に「黄色い花が咲いた」と口にするかどうかはここでは問題ではない。黄色い花を目にするという経験それ自体がここでの問題である。この黄色い花の美しさに魅了されているときに――^A西田が言う意味で「純粋に」経験がなされているときに――、すでに、その花が花として受け取られ、そしてその色が黄色として受け取られているのではないだろうか（そうでなければ、その花の美しさに魅了されるということもないであろう）。そこにすでに言葉が働きでおり、それ以前に私たちは立ち戻ることができないのではないだろうか。

私たちはまず「原経験」と呼ぶべきものを手にして、そのあとそれをいくつかの部分に分け、その分けられた部分部分にことばを一つひとつ当てはめていくのではなく、むしろ最初から花を花として、黄色を黄色として見ているのではないだろうか。

もちろん ^bソクザに判断できない場合もある。見慣れないものを見、聞き慣れないものを聞くという経験をすることもある。しかしそのときも私たちは最初からそれを見慣れないものとして、少なくともある種類のものとして見ている。いま巨大な音響がしたとすると、私たちはそれをたとえば爆発音のようなものとして聞く。そのあと、それをこれまでの経験と引き比べながら、何として見なしたらよいかを頭のなかで ^cケントウする。近くでビルの解体工事が行われていたことを思いだして、それは爆発音ではなく、ビルの解体作業で、クレーンが大きな鉄球をビルのコンクリート壁にぶつけている音であるというように考えたりする。

このように、私たちがなすすべての経験につねに、つまり私たちが何かを見何かを聞くときすでに、私たちが前もって獲得している世界理解の枠組み、つまり、言葉によって作りあげられた、世界において起こる出来事や事物を理解し解釈するための枠組みが関与しているように思われる。

もう少し具体的に言えば、私たちが何かを見、何かを聞くとき、私たちははじめからそれを花として、ヒマワリとして、そしてその色を黄色として、見ているのではないだろうか。 ^Bこの「……として」の「……」のなかに、言葉が働きでているのではないだろうか。

一般に「言葉とは何か」ということを考えてみると、二通りの理解が成り立つように思われる。

第一に考えられるのは、言葉は、考えるための、あるいは考えたものを表現するための道具である、という理解である。つまり言葉は、あらかじめ存在している思考の内容――それは日本語とか英語といった具体的な言語、自然言語以前のものと言わざるをえないであろう――に形を与えるものであるという考えである。

それに対して、第二に、思考は言葉を通してはじめて成立するのであり、言葉は思考の単なる道具ではない、という考え方も成り立つ。つまり、思想は言葉という形をえて、はじめて思想として成立するのであり、それ以前に純粹な思想というものがあるわけではない、という考え方である。

この二つの考え方は、それぞれ次のような考えに結びついている。

第一の見方は、私たちが日本語なり、英語なり、自分の言語（母語）を使う以前に、つまり、水とか、木とか、土とか、あるいは *water*とか、*tree*とか、*soil*といったことばを使う以前に、言いかえれば、ある事柄にそういう名前をつける以前に、もの、あるいは世界が客観的に区分（分節、articulate）されていて、それぞれに、いわば偶然的な仕方、たとえば日本語であれば「水」という名前を、英語であれば「water」という名前をつけているのだ、という考えと結びついている。ここでは言葉は、一つの符牒ふちようとして、つまり道具とみなされている。

それに対して、第二の見方の方は、ものは言葉以前にあらかじめ分節されているのではなく、言葉とともに、はじめて分節される、つまり言葉によって世界の見え方、あるいは世界の現れ方が決まってくる、という考えと結びついている。

具体的な例を挙げて説明することにした。たとえば「青い」ということばをとってみると、まず、それに対応するものが世界のなかに客観的に存在しており、日本語を使う人はそれを「青い」ということばで、英語を使う人は「blue」ということばで言い表しているというようにも考えられる。

しかし厳密に見てみると、どうもそうではないことがわかってくる。日本語ではたとえば「草木が青々と茂っている」と言ったりするが、実際には緑色のことである。「青信号」といったことばもそうであるが、「青い」という日本語は、緑色 ^dケイトウの色をも指すことばとして使われてきた。黄色 (yellow, gelb...) にせよ、赤 (red, rot...) にせよ、それぞれの言語でそれが指す範囲は少しずつ異なっている。

別の例を挙げれば、日本語では樹木と材木とともに「木」と表現するが、英語では樹木の方は「tree」、材木の方は「wood」と、ドイツ語では樹木は「Baum」^{baum}と材木は「Holz」^{holz}ということばで表現される。そして「wood」や「Holz」ということばは材木という意味だけでなく、森という意味をももっている。それに対して日本語の「木」や「材木」が森という意味で使われることはない。

C こうした例を手がかりに考えると、以上に挙げた二つの見方のうち、第二の見方の方が、言葉の本質をとらえていると言えるであ

ろう。日本語なら日本語、英語なら英語、ドイツ語ならドイツ語というように、それぞれの言語において、いわば一つの連続体であるような知覚対象（自然）が、独自の仕方で区分（分節）されているのである。つまり、それぞれの言語においてそれぞれの仕方、知覚対象に切れ目が入られ、そのそれぞれに独自の名前（青や赤、blueやred）が付けられているのである。

もしそのように、私たちの世界を見る見方そのものに言葉が本質的に関与しているとすれば、私たちは、言葉以前に^eサカノボるということはできないことになる。私たちは言語を通してしか世界を知ることができないのである。

もちろん言葉を習得する以前の小さい乳幼児の場合は別である。このような小さな子どもには、目や耳などの感覚器官によって生理的に分節された世界だけがある。しかし言語を習得するとともに、その生理的に分節された世界に私たちは言語によって分節された世界を重ねていく。そして、その言語によって分節された世界のなかで私たちは生き、思考し、他の人とコミュニケーションをしていく。それが決定的な意味をもつ世界で私たちは生きているのである。

このように私たちの経験においては言葉が決定的な意味をもっている。しかしそうであるとしても、言葉、あるいは言葉で言い表したものがそのまま経験であるとは言えない。そこに問題があると言えるであろう。

先にも述べたように、私たちは私たちが抱く感情をたとえば「悲しい」とか「寂しい」とか言い表すが、感情はさまざまな相をもち、また大きな振幅を持ちながら、止むことなく動いていく。言葉はその一面を切り取って表現するのである。いかに詳細な描写を行っても私たちは私たちの具体的な経験を言い表すことはできない。言葉による表現と私たちの実際の経験とのあいだには大きな間隙が存在するのである。

この難問の前に私たちは置かれている。いかにすればそれを解くことができるだろうか。私たちの経験には言葉が深く関与しているという面と、言葉は私たちの経験そのものを言い表すことができないという、この二つの面を同時に考えることによってしか、私たちはこの難問に向きあうことはできないと言つてよいであろう。

言葉は私たちの生活のなかで大きな役割を果たしている。それだからこそ、同時に私たちはその限界にも目を向けなければならない。私たちの経験のもつ豊かさこそが私たちの生の源泉であることに注目しなければならない。しかし他方、私たちは言葉を使ってこそその豊かさに形を与えることができるのである。大きく言えば、私たちは私たちが経験してきたものを言葉で言い表し、それを文化という形で蓄積してきた。その文化がもたらす豊かさのなかで私たちは生きている。経験と言葉とは深く結びついており、切り離すことは

できない。この結びつきに目を向けることで私たちははじめて、この経験と言葉という難しい問題を解くための手がかりを手にすることができるとはならないだろうか。

(注) 西田——西田幾多郎。哲学者(一八七〇～一九四五)。

(藤田正勝『日本哲学入門』による)

問1 二重線部 a～e の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 1 ～ 5。

「a トウテイ」 1

- | | | |
|--------------|---------------|--------------|
| ① 派手にテントウする。 | ② 人跡ミトウの地に入る。 | ③ 苦情がサットウする。 |
| ④ トウナンに遭う。 | ⑤ 完璧なトウキユウ動作。 | |

「b ソクザ」 2

- | | | |
|----------------|--------------|---------------|
| ① ソクセキをたどる。 | ② ソクオンビンの言葉。 | ③ オクソクで決めつける。 |
| ④ ソクセキそばを開発する。 | ⑤ ハンソクを犯す。 | |

「c ケントウ」 3

- | | | |
|--------------|---------------|-------------|
| ① ホケン所に連絡する。 | ② 生命ホケンに加入する。 | ③ 仕事をケンムする。 |
| ④ ケントウ違いのミス。 | ⑤ ケンサツによる起訴。 | |

「d ケイトウ」 4

- | | | |
|---------------|---------------|------------------|
| ① ケイリヤクをめぐらす。 | ② 一族のケイフをたどる。 | ③ ケイミョウなやり取りの漫才。 |
| ④ ムケイの文化遺産。 | ⑤ 輝かしいケイレキ。 | |

「e サカノボる」 5

- | | | |
|----------------|-------------|-----------|
| ① 適用をソキユウして行う。 | ② ソゾウの美術品。 | ③ ソシナを配る。 |
| ④ ソザイの善し悪し。 | ⑤ ソコクに帰還する。 | |

問2

「A 西田が言う意味で「純粹に」経験がなされている」とあるが、それはどのような経験か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **6**。

- ① 精神と自然を対置し、言葉以前に五感で察知されるものを、言葉でなんとか言い表すことによって、自ら直接確かめるほかにような経験。
- ② 自己と対象が一体となることによって、およそ言葉では表現できないような対象を、自らが物自身となって理解するほかにような経験。
- ③ 自己と対象が一体となった感覚を、言葉になる以前の状態のまま取り出すため、自分自身の五感により確かめ知るほかにような経験。
- ④ 黄色い花を目にして魅了される感覚それ自体であり、精神と自然との対置による物自身になって見る「自得」するほかにような経験。
- ⑤ 言葉になる以前の言絶の境である感覚を、直観を通じて物自身になって見るにより、全体として理性的に把握するほかにような経験。

問3

「B この「……として」の「……」のなかに、言葉が働きでている」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **7**。

- ① 私たちが見慣れない経験をした場合においても、世界理解の枠組みである言葉以前の感覚が用いられていること。
- ② 私たちが経験するときに、感覚をいくつかの部分に分け、その部分に言葉を当てはめて表現すること。
- ③ 私たちの経験は、直観という言葉になる以前の経験から構成されており、精神と自然が組み込まれていること。
- ④ 私たちが何かを見たり、聞いたりするとき、言葉以前の感覚が深く関わり、直観を可能にしていること。
- ⑤ 私たちが経験するときに、私たちが前もって獲得している世界理解の枠組みとして言葉が関与していること。

問4

「C」こうした例を手がかりに考えると、以上に挙げた二つの見方のうち、第二の見方の方が、言葉の本質をとらえていると言える」とあるが、筆者がこのように言うのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は

8。

① 世界というものが客観的に存在し、言葉はその世界を理解する枠組みや符牒として作用しているに過ぎないという見方を取り、世界が言葉を通して言葉とともに分節され、私たちの世界理解そのものに関与しているという見方は排除されて、言葉の客観性が明確になるから。

② 日本語の「青い」や「木」という言葉の指す意味内容や範囲が、英語の“blue”やドイツ語“Holz”と違っていているという事実を踏まえれば、言葉に対応する世界が客観的に存在し、言葉はその存在を明示するためのものであり、符牒に過ぎないと考えほうが自然だと言えるから。

③ それぞれの言語でそれが指す意味内容や範囲が少しずつ異なっている事実を踏まえれば、世界が客観的に区分され、それぞれの言語が偶然的な仕方で名前をつけているとの言葉を道具とみなす見方より、世界は言葉とともに分節され、言葉によって世界の見え方、現れ方が決まってくるとみなす見方の方が言葉の性質を忠実に説明できるから。

④ 「言葉とは何か」については、一つ目は言葉を思考の道具としての考え方、二つ目は思考は言葉を通じて成立する、と二通りの理解が考えられるが、それぞれの言語において、言葉の指す意味内容や範囲が異なることにより、言葉は客観的世界をそれぞれの言語により分節する道具であると言えるから。

⑤ 日本語における「青い」と英語の“blue”の指し示す意味内容と範囲が異なることや、「木」の例に見られるように、客観的な世界があり、それぞれの言葉が偶然的な仕方で名前をつけるのであって、生理的に分節された世界を各言語によって各々の言葉で呼び分けていくものとは考えられないから。

問5

本文における筆者の考えを説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 西田幾多郎は精神と自然とを対置する二元的立場を批判し、「純粹経験」を提唱した。「純粹経験」とは具体的な経験の一面面であり、言葉で言い表すことができない。しかし、言葉以前の「原経験」といったものはなく、私たちは言語を通して言語とともに世界を分節し理解するのであり、経験より言葉を優先させ、文化という形で蓄積させることが不可欠である。

② 「純粹経験」は「物自身になって見る」「内より之を知る」「之を言い表す符号」の経験である。言葉については、思考の道具とする考えと思考は言葉を通して行われるとの考えがあり、客観的な世界をそれぞれの言語が偶然的な仕方で分節するとの考え方が主流である。私たちは経験を言葉で全て表現することはできないが、言葉を使ってしか世界を理解できない。

③ 言葉は私たちの具体的な経験の一面面しか示すことができない。言葉以前の「原経験」は、それぞれの言語が世界を偶然的な仕方で分節することで、世界理解の枠組みとして表象される。それゆえ、それぞれの言語はその指し示す意味内容と範囲が異なり、正確な翻訳は不可能である。経験のもつ豊かさと言語の限界に着目することが難問解決のポイントである。

④ 「純粹経験」とは自己と対象が一体となった経験である以上、自ら直接経験するしかなく、言語化が困難である。しかし、私たちが経験するとき言葉によって作り上げられた世界理解の枠組みを通して経験するのであり、経験には言葉が深く関与している。生の源泉である経験の豊かさとそれに形を与える言葉の結びつきに着目することが難問解決のポイントである。

⑤ 「純粹経験」とは自然と精神の二極対立から生じる経験であり、「言絶の境」であり、「自得」するほかないものである。しかし、言葉以前の「原経験」といったものそれ自体として取り出すことができず、私たちが経験するとき、すでにある言葉を通して世界を分節し経験するのであり、経験には言葉が深く関与している以上、「純粹経験」は架空のもので、考察に値しない。

二 (現代文)

次の文章は、幸田文『木』の一部である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

八月の檜^{ひのき}は、意気たかい姿をしていた。まだ遠くに見るうちから、木が活気あふれて立っていることが、よくわかった。近付いてみれば、どの檜もどの檜もが、意欲的に生きていることを示していた。

もし木がしゃべりだすとしたら、こんな時なのではなからうか、と思ったほどその場の檜は、積極的に旺盛^{おうせい}なものを発散していた。もっと伸びるのだ、もっと太ろうとしているのだ、といったような、そんな意志みたいなものを感じさせられた。木がこんなふう^{ひのき}に気を吐くものとは、はじめて知った。木の持ついのちの勢いというが、生気または精気というのが、これかと思った。(注1)よりまし、というようなことばも反射した。別にこわいとか恐れとかいうのではないが、いつも見る木とは今日は様子がちがう、といった妙なひるみがでて、けれどもそのひるみを同行の、山森をよく知る人に白状する気にもなれず、するともう一人の同行の、これは樹木なんの関心も持たない若い女性が、素直な声をあげて、なんともいえない好い気持^{きもち}のところですね、といった。その通りだった。私たちは木立のちよつと途切れた道にいて、いま正午をすぎたばかりのあつい陽^ひをあび、しかも行手の黒く繁^{しげ}った森からくる冷たい風に吹かれていた。夏の(注2)闊達^{かつたつ}なところよさを満喫^{まんきつ}しているのだった。だが、まだしばらくのあいだ、私は戸惑っていた。いままで一度も見^みたことのない、木の一面にはじめて出会^{であ}った、という咀嚼^{そしゃく}しきれないものがあつた。

A 去年の晩秋にも、ここへ檜を見にきているのだが、その時から夏にもせひもう一度と思っていた。そういう思いかたは私に、抜きがたい家庭人の癖がついているからだとおもう。若い頃にしみこんだ、料理も衣服も住居も、最低一年をめぐって経験しないことには、話にならないのだ、と痛感したその思いが、今も時にふれて顔をだすのである。檜のような、いつ見ても同じような姿をしている木を、秋にみただけでは済ませられずに、夏もまた見ようという気を起すのは、植物を丁寧に見ようとする心掛けからというより、家事業で身につけた経験から出てくる、いわば要心^{ようしん}みたいなものである。一年めぐらな^いと確かではない、という要心である。その要心をしてよかつたとおもう。秋と夏では、檜の様子はまるでちがった。夏の檜は、とにかく、静かになどしてはいない。音をたてて生きている、といった姿だ。いたずらに聴診器を自分の胸に当ててみると、胎内はごんごん、ごうごうと相当ショッキングな音をたてているのに驚かされ、これが生きている人体の音なのかと、今更ながらなにか頼もしいような、少し空おそろしいような、生真面目^{きまじめ}な気持にさ

せられるが、夏の檜は見るからに、その生きる騒音を幹の中に内蔵していることが明らかだった。しかも胎内の音ばかりでなく、もつと伸びる、もつと太る、といった意志のようなものを示していた。こんな姿を秋の檜からは、どう想像できよう。

秋に見たとき、檜は尋常であつた。声を感じさせ、音を感じさせるものなど、けぶりにも持つてはいなかった。静かに無言に、おとなしげであつた。おとなしげに、やさしげで、それだから親しく思うことができた。大樹は大きく丈高くて、おのずから威厳があつたが、それですら親しみやすい柔和を示していた。いま夏のこの意欲的な木を見て思いあわせれば、秋の檜の尋常さは、あれは寛ぎの時季に当るものだったろうか。はげしい夏の生活を終え、蓄積すべきものはすでに十分に満ち、冬を迎える迄の暫時を、安らいで、寛いでいた姿にちがいないと思う。ただ静かで、無言のなら、そうたやすくは親しめず、きつと冷淡さを感じたかもしれない。それが睦みやすく思えたのは、木が休息をとっていたせいだ。夏の旺盛さを見ると、秋の尋常さは休息だということがはつきりするし、秋を知っていたから夏の、ごうごうと音せんばかりの活力を感じ得たかとおもう。広葉樹は裸の枝に青く芽吹き、花をつけ、実を結び、葉を染め、そしてまた裸に脱いで、骨をみせる。いろんな派手な芸当をするから、ひとりで一年中なんとなく目をやる機会があるが、針葉樹にも四季があることはつい忘れて、一度見ればそれで知つたつもりになる。木がだますのではないが、常緑樹の地味な外見が人に早呑込みをさせる、と思つていいようである。それにしても家事の経験というものも、そう悪くないと思う。最低一年間を手がけてみなければ、話にならない、という掟が檜で効いたには意外だった。

(中略)

人にそれぞれの履歴書があるように、木にもそれがある。木はめいめい、そのからだにしろして、履歴をみせている。年齢はいくつか。順調に、うれいなく今日までできたのか。それとも苦勞をしのいでできたのか。幸福なら、幸福であり得たわけがある筈だし、苦勞があつたのなら、何歳のとき、何度の、どんな種類の障害に逢つたのか、そういうことはみな木自身のからだに書かれているし、また、その木の周辺の事物が裏書きをしている——と同行の森林の人は教えてくれた。

間近にくっついて並びたつ二本の木の、一方はまっすぐに立ち、一方は(注3)かしいでいるのを、これら二本がある時は助けあう間柄であり、ある時はライバルであつたと推定するのも、木のからだに書いてある履歴書から、そう読めるのだ、という。まずこの木が子供で弱々しかった頃、二本であるが故にたぶん、風にも雪にも耐え易かつたろう。もし一本なら折れてしまう場合も、二本ならばこそ堪えるだけの力になつたかと思われる。一本より二本は強いのである。が、その後育つうちに、各自に力がついてきた時、競わずに

はいられなかったろう。どの世界でも、力の等しいものが並べば、競いがはじまるのは自然である。力の充実した若い二本は、幼い時の互助の状態などにはかかわりなく、ライバルとしてはげしい成長争いがあったと思われる。だが、この時点では、二本はまだともにまっすぐに立っていただろう。やがて一方に差がつく。僅かの差でも、先に伸びたものの勝である。太陽と空間を気ままにすることのできた勝者は、勢に乗って、枝葉をひろげるし、それはライバルだったものには圧迫となる。負けたものは日照は不足するし、伸びようとする頭はおさえられるし、萎縮してしまう。それでも、もし周囲に、同じ年齢、あるいはそれよりもっと大きい木々が、すくすくと生えていたとすれば、先を越され頭を塞がれたこの木も、不服ながら二番手に **X**、しかしまっすぐ素直な姿のままで、生きていったかもしれない。横にかしぐだけの、余地の空間がないから、(注4)うもすもなく、止むを得ず真っすぐに生きるしかないだろう。

だが、ここでまわりの状態に変化があった。どういう変化だったかはわからない。すぐそばにあった老木が、寿命で倒れたのでもあろうか。または人による伐採が行われたのだろうか。それともまた大雨か、雪解け水かで、土が動いたか。とにかく何かの理由で、このすぐそばの何本かが、生命を失い、そこにぽっかりと思わぬ空間ができた、と見るのである。「その証拠にはごらんなさい。まわりの状態に比べて、この木のところだけ、なんだかへんな隙間になっていると思いますか。木の履歴書と周囲の状況を読み合わせると、そんなことになります。」

日照を阻害されている木が、このチャンスを逃すわけではない。二番手でまっすぐにいくより、太陽と空間を得ようとして傾くのは当然である。従って、ここで(注5) 軀幹は永久の癖を背負ったことになる。 **B** 木の履歴書のそうした読み方をきくと、木の生きていく苦しさと、人の生きていく苦しみが、あまりにもよく似ているので、しきりに親身な感情がうごいて、気をつけて見れば、ここにもそこにも、苦患の記録をつけた木は沢山あるのだった。こぶを抱えたもの、ねじれのきたもの、曲ったもの、本来の幹が折れたかして、途中からのわき枝が幹に代って立ち上ったもの、根元は一つなのに三米ほどのところから二又になったもの、密着して二本が一本のようにになっているもの等々、変形の個所をもつ木は珍しくない。しかもその歪みや曲りのところは、外見の変形だけでなく、内側も木の組織がムラになって、意固地に固く変質していて、材に挽こうとすれば抵抗がつよく、そのあげくは挽いている最中からもうひどく反りかえったり、または裂けてしまったりする、という。それをアテと呼んで、使いものにならぬ役立たずの、厄介物なのだという。アテはよくないもの、悪いものとして、なにか最低の等級にも入れられない、それ以下のものとされているようにきこえた。

「なぜなんでしょう。だってその曲りやゆがみは、いわば力ではないんですか。それあったが故に、木は折れも倒れもせずに生きてきたんじゃないんですか。」

「そうです、木が立木で生きていた時はね。しかし、木が立木ではなくなつて、材とするとき、アテはどう救いたくても救えない、最も悪い欠点です。」

「そんなにけなしつけるとは、あんまりひどい。さんざ辛い目を我慢して頑張つてきたというのに、厄介者だの役立たずだのと、なぜそんな冷淡なことをいうんでしょう。木の身になつてごらんさい、恨めしくて、くやし涙がこぼれます。」

「こりや珍しいことをきくものだ。この土地は林業、製材業が多くて、木のことにかけてはみな相当に関心をよせていますが、アテを劣等といつて、オコラレたという話はきいたことない。アテはそりやもう、**Y**ですからね。かわいそうなんていう者はない。」

どうやら私の感傷は、受付^{うけつ}けられないらしくて、言えはいほど相手はきよとした表情になる。要するにアテは、それほどよくないものなのだろう。だとすれば私は、それがどう悪いのか、どうよくないのか、自分の目で見て確かめなくては、このままではすまされなと思った。アテがどんなふうに役立たずの厄介ものか、見せてもらえまいか、と頼んだ。きよとした表情が、呆^{あき}れた表情になり、困却になり、そして笑いになつた。

「そりやまあ、して出来ないことでもありませんから、なんとか計らつてみてもいいけど、こんな^(注6) 註文^{ちゆうもん}はじめてだ。」

心の中がアテの悲しさでいっぱいになりながら、林の道を進んだ。アテの木ばかりが目につく。気楽にのんびりして見えるアテは、一本もなかった。百年二百年の立木一本は、どんなに重いものだろう。薪^{まき}一本の重さでも、バカにはできない。一把ともなれば、もうウンウンいわなければならぬ。まして立木の重さである。およその察^{さつ}しさえつきかねるが、哀れと思う下心があつて見れば、アテはどれも醜^{みにく}さをさらしたまま、苛酷^{かこく}な重量を堪えているかのようなのだ。見るほどに目が辛くなつてきた時、この少し先に、大樹ときわめつきのある良い木があります、という。

大樹、というのとエリートの木というのと、同じなのか違うのか知らないが、それはまさにエリートというべきものか、と思つた。エリートというには、それ一本だけよいのではなくて、周囲に何本もの質のいい、いわばお供の木というものが揃^{そろ}つていなくてはいい、ときいた。エリート^{エリート}の条件は、樹齡樹勢その他いろいろな定めがあることもちろんだが、お供^{お供}というか親衛隊^{しんゑたい}^{しんゑたい}というか、そういう引き従^{きつ}えるもののあることも、資格のうちというようである。その大樹はきわめつけただけあつて、ひと際^{きわ}ぬきんでていたが、まわり

の一族もすくすくと素直に、粒をそろえていい木が囲っていた。アテの変形をみて辛くなっていた目に、それはこの上なく心伸びやかになる情景として映った。思わず、素直なものはさすがにいいわね、といった。^Cアテは氣持をしぼるようにしてくるが、エリートは心をなごやかにひらかせた。

^Dエリートよりもつといい氣分の林もあります、という。谷をはさんだ向う側の林だった。なんだか今見てきた大樹の残像があつて、その林がそれほどいいというのがわからず、ぼんやりと見ていた。谷を距^{へだ}てているから遠くもあるし、ごく普通のような景色としか思えない。ただ、ここはそろって幹がまっすぐだった。斜に傾^{かし}いだ木がない。遠見はことに、垂直の中の斜めはよくわかるのだが、それがなかった。だから行儀がいいのだが、まさかそれが取柄というわけでもなかるうに、と思ううち氣が付いた。行儀のいいものは上品だが、しばしば活氣に欠けることが多い。それをここは元氣に茂っている、といった感じがある。

「その通り、この林は元氣です。老樹と、中年壮年の木と、青年少年の木と、そして若い木と、すべての階層がこの林では揃って元氣なのです。将来の希望を托^{たく}せる、こういう林が私たちには一番、いい氣特に眺められる林なんです。」

すべての年齢層がそろっていて、一斉に元氣であることが、即ち将来性のある繁榮^{すなわ}なのだ、というのである。なるほどとおもう。道はせばまって、川へ突^{つき}あたり、栈橋がかかっている。皮つきのままの細丸太を、横に並べた栈橋である。並べた丸太と丸太の窪^{くぼ}みに、檜^みの実生が、センチにもならぬ何ミリの小さい芽を、だが、はつきりと青くもちあげていた。これが二百年生きる木の、振り出しの姿なのだが、信じがたい頼りなさである。とはいうが、いま見てきた繁榮の林のめでたさも、そもそもはこの可愛^{かわい}らしいひ弱さからの出発にまちがいない。ごみのように見える檜の子は、エリートにもアテにもない、いじらしさをもっていた。それは、伸びよと祈らせる強いいじらしさだった。

(注) 1 よりまし——呪術で、神靈を一時的に宿らせるための子供、または人形。

2 闊達^{かつたつ}——心が広く、小さな物事にとられないさま。

3 かしいでいる——傾いている。

5 軀幹^{くかん}——体幹。

4 うもすもなく——いいともいやだともなく。

6 註文——注文と同じ。

問 1

波線部 p r の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **10**。

「p 咀嚼しきれない」

10

- ① 心が十分に満たされることがない
- ② よく考えても十分には理解できない
- ③ あまりにも突然ですぐに思いつかない
- ④ 言葉で十分に言い表すことができない
- ⑤ 前向きにとらえることができない

「q 暫時」

11

- ① 一瞬
- ② 空き時間
- ③ 分かれ目
- ④ 長い間
- ⑤ しばらくの間

「r 芸当」

12

- ① 工夫を凝らした仕掛け
- ② 手の込んだ演出
- ③ 特別な能力を必要とするわざ
- ④ 変化に富んだ振り付け
- ⑤ 目標に向けて起こす行動

問 2

X、

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **13**。

14。

X

13

- ① 倣って
- ② 甘んじて
- ③ 配慮して
- ④ 追いすがり
- ⑤ 躍り出て

Y

14

- ① 頭でっかち
- ② 舌足らず
- ③ せっかち
- ④ 鼻つまみ
- ⑤ おせっかい

問3

「A 去年の晩秋にも、ここへ檜を見にきているのだが、その時から夏にもぜひもう一度と思っていた」とあるが、筆者がこのように思っていたのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **15**。

- ① 家事業を通して身につけた、何事も一年を巡らないとわからないものだという心構えから、秋の檜を見ただけで檜のことを理解したつもりになつてはいけないという思いがあつたから。
- ② 森林のことをよく知っている人の説明を受けながら檜を観察することにより、自分一人で観察するのとは違うさまざまな視点から檜を見ることができるという思いがあつたから。
- ③ 森林の木々を丁寧に観察しようとする自分自身の心がけもあり、夏の檜をしっかりと観察する上で秋からの一年間で木々がどれほど成長するかを知りたいという思いがあつたから。
- ④ 秋と夏の檜とは様子が違うことの予測はつくものの、文筆家という立場上、夏の檜を見てその違いを確認することで、その後の執筆活動に生かしたいという思いがあつたから。
- ⑤ 去年の秋に檜を見るためにこの場所を訪れたが、時間の経過とともに忘れていることもあり、再度観察することで檜の素晴らしさを心ゆくまで味わいたいという思いがあつたから。

問4

「B 木の履歴書のそうした読み方」とあるが、ここで言う「木の履歴書」の「読み方」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **16**。

- ① 森の木々は様々な環境の変化に適応してきた過程がその身体の一部として記録されたものであり、その適応力は成長し続ける生命力でもあるため、今後の森林の繁栄を考える上で参考となるものである。
- ② 日照不足や大雨の影響を多大に受けた木々は、その姿自体が過去の環境や経験を示したものであるが、環境破壊に伴い成長が阻害され生育状況に影響を与えるなどの様々な環境悪化に警鐘を鳴らすものである。
- ③ 密着した木々から、助け合う間柄でもあれば敵対関係でもあったというその関係性を察することができるが、人間も自然の摂理によつて生かされた存在であることから、自然の法則に沿った人間の生き方を示唆するものである。
- ④ 太陽の光を求めて曲がったり強風のためにねじれたりした木はいびつなものに見えるが、それは自然の中で生き延びようとした証であり、そのことを踏まえてその木の今ある姿をより深く理解するものである。
- ⑤ 年輪を調べることで樹齢に加え、過去の気温や降水量などの気候変動も理解することができるため、気象予報や健康への影響という人間生活の営みに関することを考える上での資料となるものである。

問5

「C アテは気持をしぼるようにしてくる」とあるが、筆者は「アテ」をどのようなものとして見ているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **17**。

- ① 「アテ」は、変形の箇所を多く持ちその歪みや曲がりや外見だけでなく内側も固く変質していることから、無愛想に感じられ冷たな気持ちにさせるものである。
- ② 「アテ」は、苦難の連続であったにもかかわらずそれに動じることなく成長してきたが、そんな姿を見ることが安心感を与えて気持ちを落ち着かせるものである。

- ③ 「アテ」は、根元が一つで途中から二又になるなど多くの欠点がある上に、お供を持つ大樹と比べられるとその扱いの違いに理不尽さを感じさせるものである。
- ④ 「アテ」は、困難な目に遭い苦しむことが多くあっただけでなく、最低の等級にも入れられないものとして取り扱われることで寂しさやむなしさを覚えさせるものである。
- ⑤ 「アテ」は、成長する中で多くの苦しみや悲しみを乗り越えて頑張ってきたものであり、そうした力強さやたくましさに深い共感が持て、親しみを感じさせるものである。

問6

「D エリートよりもっといい気分の林もあります」とあるが、森林の人のいうエリートの木と「いい気分の林」とはどのようなものか。その説明として、最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **18**。

- ① エリートの木は、引き従えている周囲の木も素直にすくすく育っているが、「いい気分の林」は、この上なく心が伸びやかになるような情景であり人の心に安らぎを与えてくれるものである。
- ② エリートの木は、樹木の生育状態もよく成長の勢いがあるが、「いい気分の林」は、奥深い地域に多くの木々が林立し、木のもつ命の勢いや生気を思わせるほどの神秘性や神聖さがあるものである。
- ③ エリートの木は、周囲に質のいいお供の木というものがそろっているが、「いい気分の林」は、老樹から中年壮年の木や若い木とあらゆる世代の木々が生息し、将来的には繁栄が期待できるものである。
- ④ エリートの木は、幹がまっすぐで周囲の木も斜めに傾いていないが、「いい気分の林」は、どの木も同様の高さで太さで均一性があり、良質の材木が供給されるので林業にとっても望ましいものである。
- ⑤ エリートの木は、大きく丈高くておのずから威厳があるが、「いい気分の林」は、音を感じさせるものなどなくひっそりとしていてやさしげであるため、親しみやすさを感じるものである。

三 (古文)

次の文章は『うたたね』の一節で、ある貴族との恋に破れた作者が出家を決意し、出仕先の安嘉門院の御所から出奔する場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

ただ今も出でぬべき心地して、^pやをら端を開けたれば、晦日^{つひ}ごろの月なき空に雨雲^aたち重なりて、いともの恐ろしう暗きに、夜もまだ深きに、宿直人^{とのあ}さへ折しも^(注1)うち声づくろふもむつかしと聞きゐたるに、^Aかくても人にや見つけられんと空恐ろしければ、もとのやうに入りて臥しぬれど、^(注2)傍なる人うち身じろき^bせず。さきさきも宿直人の夜深く門を開けて出づるならひなりければ、その程を人知れず待つに、今宵しもとく開けて出でぬる音すれば、さるは心ざす道も^qはかばかしくも覚えず。ここも都にはあらず、^(注3)北山の麓といふ所なれば、人目しげからず、木の葉の陰につきて、夢のやうに見置きし山路をただ一人行く心地、いといたく危ふくもの恐ろしかりける。山人の目にもとがめぬままに、あやしくものぐるほしき姿したるも、すべて現^{うつ}のこととも覚えず。さてもかの所^(注4)西山の麓なれば、いとはるかなるに、夜中より降り出でつる雨の、明くるままに、しほしほと濡るる程になりぬ。故里より嵯峨^{さが}のわたり^cは、少しも隔たらず見渡さるる程の道なれば、さはりなく行き着きぬ。

夜もやうやうほのぼのとする程になりぬれば、道行人^{みちゆき}も、ここもとはいとあやしととがむる人もあれば、^Bものむつかしく恐ろしき事、この世にはいつかは覚えん。ただ一筋に亡きになし果てつる身なれば、足の行くにまかせて、はや山深く入りなんと、うちも休まぬままに、苦しく耐へがたきこと、死ぬ^dなり。入る嵐^{あらし}の山の麓に近づく程、雨ゆゆしく降りまさりて、向への山を見れば、雲の幾重ともなく折り重なりて、行く先も見えず。からうして^(注5)法輪の前過ぎぬれど、果ては山路に迷ひぬるぞ、すべき方なきや。惜しからぬ命も、ただ今ぞ心細く悲しき。いとどかきくらす涙の雨さへ降り添ひて、来し方行く先も見えず、思ふにも言ふにも足らず。今閉ぢめ果てつる命なれば、身の濡れ通りたること、^C伊勢の海人^{あま}にも越えたり。

いたくまはりはてにければ、松風の荒々しきを頼もし人にて、これも都の方よりと覚えて、蓑笠^{みのかさ}など着てさへづり来る女あり。小童の同じ声なると物語するなりけり。これや^(注6)桂^{かつら}の里の人ならん^rと見ゆるに、ただ歩みに歩み寄りて、「これは何人ぞ。あな心憂^{こころなや}。御前は人の手を逃げ出で給ふか。また口論などをし給ひたりけるにか。何故かかる大雨に降られて、この山中へは出で給ひぬるぞ。いづくよりいづくを指しておはするぞ。あやしあやし」とさへづる。何と言ふ心にか、舌をたびたび鳴らして、^D「あないとほしいとほ

し」と繰り返し言ふぞ嬉しかりける。

(注) 1 うち声づくろふ——咳払いをする。

2 傍なる人——この部屋の主である女房。作者は当日、この女房の部屋で過ごしていた。

3 北山の麓——衣笠山、船岡山あたり。作者が当時仕えていた安嘉門院の御所がある。

4 西山の麓——嵯峨、大原野あたり。ここに作者がめざす尼寺がある。

5 法輪——嵐山の麓の法輪寺。

6 桂——現在の京都市西京区上桂のあたり。

問1

波線部 p、r の解釈として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は 19、21。

「p
やをら」

19

① 瞬時に

② そつと

③ うまく

④ 急いで

⑤ いきなり

「q
はかばかしく」

20

① ものもののしく

② はるかに

③ ばからしく

④ たよりなく

⑤ はっきりと

「r
あな心憂」

21

① ああお気の毒に

② ああ氣にくわないわ

③ ああご安心なさい

④ ああ驚きましたよ

⑤ ああ恐ろしいことよ

問 2

空所 a d に入れる語の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 22。

- | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| ① | a | だに | b | ばかり | c | さへ | d | すら |
| ② | a | すら | b | まで | c | ばかり | d | さへ |
| ③ | a | さへ | b | だに | c | まで | d | ばかり |
| ④ | a | ばかり | b | すら | c | だに | d | まで |
| ⑤ | a | まで | b | さへ | c | すら | d | だに |

問 3

「A かくても人にや見つけられん」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 23。

- ① こうしているけれども、人には見つからないだろう。
- ② こうしていれば、宿直の者に見つかってしまうことはない。
- ③ こうしているものの、傍らの女房に見つかるのではないか。
- ④ こうするうちにも、人に見つけられるだろうか。
- ⑤ こうしていても、人に見つからないはずがない。

問 4

「B ものむつかしく恐ろしき事、この世にはいつかは覚えん」の解釈として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は 24。

問5

- ① このように困難で大変なことでも、この世で生きていくうちにいつか忘れるだろう。
- ② これほど煩わしく恐ろしいことは、この世に生まれて以来一度も感じたことがない。
- ③ このように恐ろしく気になったことが、この世にあるかぎりはずっと覚えておこう。
- ④ これほど面倒で不安なことが、この世にあったことなどすぐに忘れてしまおう。
- ⑤ これほど気味が悪く恐ろしいことを、この世に生きているうちは経験したくない。

「C 伊勢の海人^{あま}にも越えたり」とあるが、これを「伊勢の海人の朝な夕なに潜^{かづ}くてふみるめに人を飽くよしもがな」(『古今和歌集』)を踏まえて表現されたものであるとした場合、作者はここにどのような気持ちを込めたと考えられるか。その気持ちの内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **25**。

- ① 雨に涙まで加わって濡れまざる苦しさを訴える気持ち。
- ② この世にも人間にも飽き果てた厭世^{えんせい}的な気持ち。
- ③ 伊勢の海人の過酷な状況に我が身を重ねて悲しむ気持ち。
- ④ 仏への帰依だけではなく伊勢の神の加護をも願う気持ち。
- ⑤ 失恋した相手へのなお断ち切れない未練がましい気持ち。

問 6

「D」「あないとほしいとほし」と繰り返し言ふぞ嬉しかりける」とあるが、ここにおける状況の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **26**。

- ① 蓑笠を着た女から怪しまれた作者が、怪しまれることにかえって喜びを感じるほどに錯乱している。
- ② 蓑笠を着た女と口論になった作者が、桂の里人の仲裁によって救われたことをうれしく思っている。
- ③ 桂の里人に不審に思われた作者が、舌打ちしながら釈明するうちにひとり愉快な気分になっている。
- ④ 桂の里人が重ねて気にかかる言葉を聞いた作者が、雨の道中のつらさから解放されて気をよくしている。
- ⑤ 作者をよそ者として警戒する桂の里人の心を和らげることに成功した作者が、舌を鳴らして喜んでいる。

問 7

本文の内容と**合致しないもの**を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **27**。

- ① 雨の降るつらい山路となったが、作者は張り詰めた思いで迷わず目的地に向かった。
- ② いつもは宿直人は深夜に退出する決まりだったが、この日に限って早く御所を出た。
- ③ 夜道では目立たなかった作者の姿も、夜が明けたため人目につくようになった。
- ④ 出奔しようとした作者は宿直人の咳払いを耳にし、一度床に戻って機をうかがった。
- ⑤ 北山の麓から嵯峨のあたりにかけてはおよそ平地だったので、支障なく歩みは進んだ。

問 8

本文の出典である『うたたね』の作者の作品として適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **28**。

- ① 更級日記
- ② 土佐日記
- ③ 十六夜日記
- ④ 蜻蛉日記
- ⑤ とはすがたり

四 (総合)

次の文章は、鴨長明の『方丈記』について論じたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。

——ゆく河の流れは絶えずして、しかもとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

有名な文句ではじまるこの『方丈記』は、世の無常をうたいあげた日本の中世文学の代表とされています。たしかに彼は、この短い随筆のなかで、くりかえし、人の世のはかなさを強調して、人生を水泡や朝顔の露になぞらえています。けれども、よく読んでみると、ここに記されているのは、はじめから終わりまで、じつは住まいについてなのです。A『方丈記』とは住居論だ、と言ってもいいほどです。たとえば、前記の有名な書き出しの文句につづけて、彼はこう書いています。

「世中にある人と栖すみと、またかくのごとし」

人と栖すみ、となつていますが、長明が人間そのものよりも、人間の住む「栖」のほうを念頭に置いていることは、すぐそのあとで、つぎのように言っていることから、じゅうぶんうかがうことができます。

——都みやこのうちに、棟を並べ、甍むらを争へる、高き、賤いやしき、人の住すまひは、世々を経て、尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀まれなり。或は去年焼けて、今年造れり。或は大家亡びて、小家となる。

だから、「知らず、仮の宿り、誰が為ためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる」と言うのです。それゆえに、「さびしき住いほりひ、一間の庵、みづからこれを愛す」と言うのです。つまり、いくら立派な家をつくつてみたところで、火事や、地震や、台風にあえば、ひとまりもないのだから、そんな住まいをのぞむより、方丈の庵のほうが、ずっと気楽ではないか、と言うわけです。

この意味で、『方丈記』は、まことに単純明快な住居論だと言ってもいいでしょう。彼は道を求めるために、庵を結んだのではなく、地震や火事をおそれるがゆえに、都から疎開したのです。身の安全のために、です。

そもそも住居というものは、身の安全を確保するためのものです。人間のみならず、生物はすべて、敵から身を守るために巣をつくりま

す。ところが、身のまわりの危険がうすらぐと、住居は身を守るといふ本来の目的からしだいに離れて、より快適な、より目を喜ばしめるものへと変わってゆきます。そして、それが人間の文化のはじまりでした。

人びとはある場所に定着し、一応の安全が確保されると、こんどはたがいに栖を競い合うことによつて生活を向上させ、やがて集落から村へ、村から町へ、町から都へという形で文明を築いていきました。この意味で、文明とは栖にはじまり、栖に終わる、と言つてもいいのではないのでしょうか。バビロンは、このようにして栄えました。ローマも、こうして世界の都になりました。

けれど、たとえ人間がどのように手をつくしても、しよせん自然の力には勝てません。栄華を誇つた過去のさまざまな都市の多くは、地震や、洪水や、火山の噴火などの天災によつて、瓦礫がれきの廃市になってしまいました。しかし、そうであればこそ、彼らは何とかして、

^a ケンゴな栖を、安全な都市を築こうと最大の努力を払ってきたのです。彼らが、まわりにある豊富な木材よりも、遠くから切り出さねばならぬ石材をえらんだのは、ひとえに安全性、耐久性を重んじたがゆえでした。

ところが、奇妙なことに、日本人は、安全性や耐久性について、あまり関心を払ってきませんでした。日本ほど地震や台風に見舞われる地域はめずらしいというのに、そうした天災に対して身を守るといふことを ^p 一義的に考えないというのは、まったく不思議と言ふほかありません。いったい、なぜなのでしょう。

おそらく、日本という国は島国なので、異民族に攻められる危険がなかったからではないでしょうか。天災はやむをえない。しかし、外敵に侵入されるおそれは、まずないのだから、という樂觀が日本人の心の底にあつたためのように思われます。

もちろん、戦争はたくさんありました。しかし、その戦さは異民族との戦いではありませんでした。言つてみれば、身内どうしの争いです。ですから敵と言つても、たかが知れています。敵は恐ろしいが、異民族のように気心が知れないわけではない。要するに大したことではないのです。

私はかねがね不思議でなりませんでした。日本では、およそ、町や都市を城壁で囲う、ということがありません。これは他国では考えられないことです。ヨーロッパ、いや、ヨーロッパだけではなく、どこの国へ行つても、町はまず城壁をめぐるすことによつて生まれます。ところが、日本では、城下町と言われる町であっても、城壁が見られるところは皆無です。いくら城をケンゴにつくつても、これでは何にもならないではないか、という気がしますが、日本人には、安全のために町を囲うなどという発想は、ついに生まれませんでした。そして、これも敵というものに対する樂觀、気安さからきているように思われてなりません。

長明はそのような ^B 日本人の樂觀に対して、こう批評しています。

——すべて世の人の栖を造るならひ、必ずしも、事の為にせず。或は妻子・眷属けんぞくの為に造り、或は親昵しんぢつ・朋友ほういうのために造る。或は主君・師匠および財宝・牛馬の為にさへ、これを造る。^Cわれ今、身の為に結べり。人の為に造らず。

つまり、人びとの住まいを見てみると、彼らは、必ずしも「身のため」、すなわち、わが身の安全のために家をつくるのではなくて、妻子や親族、あるいは親しい知人や友人のためにつくっているかのようだ。あるいは主君や師匠や、さらには財宝や牛馬のためにさえつくっているように思われる。これはおかしい話ではないか、と言うのです。世の人びとは自分以外の者のため、しかも彼らの安全のためと言うより、彼らの目を喜ばせるために家をつくっているのは、どうしたことであろう、と彼はくびをかしげています。それは本末を転倒しているのではないかと。

住まいというものは、何よりもまず自分のため、安全のためにつくるべきではないのか、というのが長明の出発点であり、同時に到達点でありました。そして、彼はただそのように論じただけでなく、みずからそれを実践したのです。ここに長明の合理主義があり、個人主義があります。彼は人の世の無常を、詠嘆りやうした歌人と言うより、また『発心集』を編んだ宗教者と言うより、何よりもまず合理主義者でありました。その合理主義は、つぎのような彼のアイディアによくあらわれています。

——（わが庵の）広さはわづかに方丈、高さは七尺がうちなり。所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて、造らず。土居を組み、うちおほひを葺ふきて、継目ごとに、かけがねを掛けたり。もし、心にはかなはぬ事あらば、やすく他へ移さんがためなり。その改め造る事、いくばくの煩わづらひがある。積むところ、わづかに二輛りやう、車の力を報ふほかには、さらに他の用途いらず。

ここと思ひ定めて家をつくるわけではないのだから、土地を物色して建てるなどというまねはしない。土台を組み、かんたんな屋根をおおい、材木のつぎ目に留め金をかけるだけだ。こうしておけば、その土地がいやになったとき、たやすくほかの土地へ家に移せるではないか。小さな家なのだから、バラバラにして運んでも車二台で足りよう。その^bウンパン料を払うだけで、あとはまったく費用がかからないですむ——というわけです。要するに移動式プレハブ住宅の発想です。

むろん、長明をしてこのように考えさせたものは、打ちつづく戦乱でした。天変地異でした。

——予^{われ}、ものの心を知れりしより、四十^{よそぢ}あまりの春秋をおくれる間に、世の不思議を見る事、ややたびたびになりぬ。

こう記しているように、彼は大火にあい、竜巻にあい、飢饉^{ききん}にあい、洪水にあっています。そして戦乱。長明ならずとも、そのような時代に生まれあわせれば、世の無常を、いやというほど感じるでしょう。けれど、日本人のほとんどが、無常を感じつつも、焼跡にすぐ復興^{つちおと}の槌音をひびかせて生きてゆくのを、長明はいぶかしげな面持ちでながめていました。なぜ、人びとは安全な住みかたを考えないのであるうか。なぜ、つまらぬ余計なことばかりに力を用いて、かんじんな自分の生活、自分が心楽しく生きられる暮しかたに心を使わないのか、と。

私は、長明のこの設問を、まことに健康な、そして、まことに、まっとうな問いかけだと思います。その問いは、そっくり、いまの日本にも通じているからです。現在、さかんに論議されている環境問題や都市問題は、じつを言えば、いまから七百数十年もまえに、長明が提出した疑問に答えようとしているにほかならないではありませんか。

むろん、世の中の様子は、そのころとはすっかりちがっています。ですから彼が、みずからの問いにくだした答え、みずから実行した試みを、そのまま通用させるわけにもいかないでしょう。けれども、**D** 彼の考えの根本にあつたもの、それは、あらためて考え直してみる必要がじゅうぶんにあります。住むとは何なのか。人はどのように住んだらいいのか。

私たち日本人は、またしても、この根本問題を忘れて、つまらぬ、余計なことばかりに心を用いすぎているように私には思えるのです。さて、そう思つて『方丈記』を読みかえしますと、この随筆が、けつして世をすねた隠者の文学などではなく、じつに率直に、人間の根本問題を考察した住居論、都市論、文明論であることに気がつくはずです。

——たびたびの炎上にほろびたる家、また、いくそばくぞ。ただ、飯の庵のみのどけくして、おそれなし。ほど狭しといへども、夜臥^ふす床あり、昼居る座あり。一身を宿すに、不足なし。

(森本哲郎『ことばへの旅(下)』による)

問1 二重傍線部 a、b のカタカナに相当する漢字を、**楷書**ではっきりとくずさずに書きなさい。なお、**送り**が必要なときは、**それも**

書くこと。解答番号は、aは記述式9、bは10。

問2

波線部 p、q の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、数字で答えなさい。解答番号は、記述式 11 ～ 12。

「p」義的

11

- ① 多くの問題の一つとすること
- ② とりあえず先に考えること
- ③ 第一に重要なこと
- ④ 一応認められる道理であること
- ⑤ 一つの考えとすること

「q」詠嘆した

12

- ① 気持ちをそのままに口に出した
- ② 嘆き悲しんだ
- ③ 深く感動した
- ④ 声を張り上げて、嘆いた
- ⑤ 深いため息をついた

問3



に入る言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、記述式 13。

- ① 粗金の
- ② 敷島の
- ③ 玉鉾の
- ④ 百敷の
- ⑤ 玉敷の

問4

「A」『方丈記』とは住居論だ、と言ってもいいほどです」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から

一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、記述式 14。

- ① 長明は『方丈記』の中で、家そのものの価値を認めず、家に執着することは愚かな事だと考え、家にこだわらないように奨励しているから。

- ② 長明は『方丈記』の中で、人の世のはかなさを強調しており、栖も同じだと述べ、人よりも住まいのほうに視点を向けているから。
- ③ 長明は『方丈記』の中で、家の見栄えをよくする価値観に反対だと述べて、自分の家づくりにもこだわらない理由を述べているから。

- ④ 長明は『方丈記』の中で、どんな立派な家でも永遠には存在しないことを挙げ、粗末な家に住むことを奨励しているから。
- ⑤ 長明は『方丈記』の中で、自らが疎開生活をする理由に都の住環境の悪さを挙げ、環境の良いところで住むように述べているから。

問5

「**B** 日本人の楽観」とあるが、長明は日本人はどのようなところが楽観的であると述べているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 15**。

- ① 日本人は城を中心に街づくりをし、城下町として町を整えたが、外国のように町全体を塙で囲むという発想は全くなく、外敵が侵入するとも考えていないところ。
- ② 日本は風水害や地震など自然災害の多い国であるので、自然災害には慣れていて、苦にせず次の日から復興に取りかかる気力をもっているところ。
- ③ 日本人は島国で国全体が海に囲まれ、異民族の侵入に備える必要がないので異民族との戦いを知らず、国内で戦争になっても、痴話げんかのようにとらえているところ。
- ④ 日本人は家にこだわる国民性があり、家を造るにあたって自分の身の安全より、他人の視線を意識し、見栄え良く造ることばかりに執着しているところ。
- ⑤ 日本人は、災害の多い国であるが、何の根拠もないのに自分の地域だけは大丈夫、大事には至らないと気楽に考えているところ。

問6 「われ今、身の為に結べり。人の為に造らず」とあるが、ここで長明はどのようなことを表明しているか。次の【 】内に当てはまるように三〇〇四〇字で説明しなさい。解答番号は、**記述式 16**。

長明は、【 】

【 】と表明している。

問7 「D 彼の考えの根本にあったもの」とあるが、その根本とは何か。次の【 】内に当てはまるように、「自然の力」、「他者」、「自分」という語を三つとも用いて三〇〇四〇字で説明しなさい。解答番号は、**記述式 17**。

【 】

【 】を優先する住居づくりが重要である、ということ。

問8 鴨長明の『方丈記』を踏まえて書かれた、夏目漱石の作品はどれか。適当なものを、次の中から一つ選び、数字で答えなさい。解答番号は、**記述式 18**。

- ① 羅生門
- ② 硝子戸がらすの中
- ③ 虞美人草ぐ
- ④ 草枕
- ⑤ 富嶽百景がく

（
余
白
）

（
余
白
）